

まとめと今後の課題

本研究の目的は、組織の中で地位の高い人が、低地位者を認知する際に歪みが生じる問題を、行動統制という要因に着目して実験的に検討することである。これまでの研究では、高地位者は運命統制という社会的勢力を持つので、低地位者を所属するカテゴリーに基づいてステレオタイプの判断しやすいことが示されている。しかし、高地位者は同時に行動統制という別のタイプの勢力を持ち、低地位者の行動を直接左右する。本研究では、運命統制とは独立して、行動統制もステレオタイプの判断の生起に影響することを、3つの実験で検証した。

まず実験1では、高地位者の側に「行動統制」「運命統制」がそれぞれ有る場合と無い場合を操作して（2×2の実験デザイン）、対象人物（低地位者）の成績から数学能力をどう認知するかを測定した。その人物の所属する「ある大学の学生は数学能力が低い」というステレオタイプがあるもとの、これに反して数学パズルの成績が良くなる実験場面を設定した。一部仮説に沿った結果も得られたが、概して良い成績のみを考慮に入れた印象が認められた。

そこで成績を少し下げるなど手続を改良して、同じデザインで実験2を実施した。その結果、行動統制がある場合には無い場合よりも、数学能力が低く評定されたことが認められた。すなわち、行動統制が運命統制とは独立して、ステレオタイプ化に影響した証拠が得られたのである。この結果は、相手への注意不足が媒介している可能性が議論された。他方、運命統制の影響は認められなかった。

さらに実験3では、行動統制を持つか持たないかだけが異なる2種類の高地位者の役割を設け、ステレオタイプ通りであれば好成績が期待される、低地位者の低成績から形成された印象が測定された。統計的有意水準には達しなかったが、得られた結果は仮説と一貫する方向で、実験2よりもより焦点をしばった行動統制の操作でも、効果が示される可能性が示唆された。

以上のようにこの実験研究では、行動統制がステレオタイプ化に及ぼす影響について、一つの証拠を示すことができた。この点が最大の成果であろう。

しかしまだまだ研究を必要とする多くの問題が残されている。まず、行動統制概念を理論的にも具体的な操作の上でも洗練させる必要がある。次に、重要な媒介過程である注意についても測定する必要がある。さらに、ステレオタイプ化の測度についてはもっと暗黙の測定も工夫する必要があるだろう。

それ以前にも、具体的課題として、実験参加者を増やして追試することが必要である。それが難しい場合でも、同じデザインの実験1と実験2のデータを合算して検討することも考えられる。ここで得られた実験結果についても、もっと深く考察してみる必要もある。特に帰属過程や対応推論の研究を参照すると、異なる視点から結果をとらえられるかもしれない。

実験 1、2 では内集団に対する否定的ステレオタイプを扱った。実験 3 では外集団に対する肯定的ステレオタイプを扱った。内集団に対するステレオタイプの意義については議論されているが (Prentice & Miller, 2002)、今後は生態学的な妥当性の高い、外集団に対する否定的ステレオタイプを用いて実験することも必要になる。

以上の課題はすぐに解決できるわけではないが、今後も地道に取り組んでいきたい。